

**令和7年度 第1回地方独立行政法人京都市産業技術研究所
評価委員会 会議録**

日 時：令和7年8月7日（木）午後1時30分～午後3時30分

場 所：京都市産業技術研究所 2階 ホールA・B

- 議題：（1）委員長の選出及び委員長代理者の指名
（2）令和6年度の業務実績評価について
（3）第3期中期目標期間の終了時に見込まれる中期目標期間における業務実績評価について
（4）中期目標の期間終了時の検討及び措置（案）について

議事要旨：

- ・以下、各委員の質問・意見など（○：委員、●：京都市、◎：産業技術研究所と表記）

【1 開 会】

- ・草木 京都市産業観光局長からの挨拶

【2 議 題】

（1）委員長の選出及び委員長代理者の指名

- ・増田委員を委員長として選出。
- ・中村委員を委員長代理者として指名。

（2）令和6年度の業務実績評価について

～事務局から評価の流れについて説明～

～京都市から資料1及び資料2に基づき評価案について説明～

○： 技術相談の新規利用者数や有料の設備利用者数が減少しているのが気になった。新規の顧客を増やす努力はされているのか。

◎： 産技研としてはやみくもに新規顧客を増やすよりも、成長支援に繋がることを意識して、京都市産業技術研究所ユーザーズコミュニティを軸に顧客開拓に取り組んでいる。例えば、ACT京都にサテライトオフィスを作り、意欲のある企業に積極的にPRするなどして新規顧客の獲得に努めている。

技術相談と機器利用については、先進機器を41機種保有しており、試験分析に強みがある。利用数を増やすことだけでなく、その試験分析で企業の困りごとが解決できるかどうかを重点的に考えている。

- ： 単純な技術支援ではなく、顧客の課題解決まで行くと時間と労力がかかるが、利用料はどのように設定しているのか。
- ◎： 技術相談は30分未満を無料としている。
また、依頼手数料と技術相談手数料を設定しているが、産技研は利益よりも企業の成長支援が主たる役目であり、無料の技術相談を中心に、柔軟に対応している。
- ： 技術相談・依頼試験と研究開発について、それぞれのリソースの配分はどのようになっているのか。
- ◎： 他機関や民間企業で対応可能なことは、他機関や民間企業に依頼して、産技研としては技術で貢献することで、技術相談・依頼試験と研究開発のそれぞれが両立できるように注力している。
- ： 数値評価だけでなく、技術支援・共同研究の難易度や企業への貢献度等も含めた評価をしたほうが、挑戦的な研究をしやすいのではないか。
- ◎： 挑戦的な研究に取り組むことは、重要であると考えており、産技研では「課題オリエンテッド研究」という仕組みを作り、年間10件程度、近未来を目指したチャレンジングな研究を推進している。
- ◎： 業務実績の評価方法は、公設試の共通な悩み。定量的な評価と定性的な評価をどう評価するかは、評価委員の皆様のご意見をいただきながら、京都市と一緒に考えていきたい。
- ： 今後、産技研としてどのようなテーマに取り組む予定か。
- ◎： 国等の方針を踏まえ、産技研としてできることを考えて中長期的に取り組んでいくべきものと、各業界の要望に対して迅速に対応するものとをバランスよくやっていく必要があると考えている。
- ◎： 産技研は、京都市からの運営費交付金で運営しており、その財源は市民からの税金である。このため、研究テーマについては、企業ニーズに応えること、京都市の産業政策に合致していることが必要不可欠であり、新しいものに挑戦することが難しかった。そこで、自己財源で「課題オリエンテッド研究」という仕組みを作り、5年後10年後の課題を見据えた研究を進めている。

◎： 研究テーマの採択に当たっては、産技研が持つ知見とリソースを活かして、できるだけ幅広く企業の抱える課題を解決できるよう留意している。

○： 顧客の課題解決に加えて、独自の技術開発を進めることによって、企業の顕在化していない課題を掘り起こすノウハウ蓄積に繋がる。それが産技研の取り組む「御用聞き型企业訪問」のような支援に活かされているのだと感じた。

(3) 第3期中期目標期間の終了時に見込まれる中期目標期間における業務実績評価について

～事務局から評価の流れについて説明～

～京都市から資料3に基づき評価案について説明～

(4) 中期目標の期間終了時の検討及び措置(案)について

～事務局から内容について説明～

～京都市から資料4に基づき措置案について説明～

○： 産技研の運営費交付金はどのように金額が決まるのか。経営が黒字であれば、削減されていくようなものなのか。

●： 産技研の運営状況などを総合的に勘案して、市議会に諮ったうえで、運営費交付金の予算を決めている。

○： 産技研は地域産業の発展や技術基盤の構築には不可欠な存在であり、産技研が持つ伝統産業と先進産業の技術力は、それらに大きく貢献できるものとする。これからも積極的に活動展開していただきたい。

○： 「御用聞き型企业訪問」の取組においては、企業の困りごとに対して、課題の本質を捉えた解決法をアドバイスすることが重要だと考えるが、どういったやり方で職員を育成しているのか。

◎： ベテランと若手職員とがセットになって顧客対応し、若手に経験を積ませることでスキルアップを図っている。

○： 第3期はメディアへの露出が増えるなど、産技研の活動内容の見える化が改善したことは素晴らしい点。

概ね中期目標の項目は達成できる見込みだということで、より上を目指すような見直しが見られる項目があっても良いのではないかと。変化の激し

い時代の中で、4年先の目標数字を決めていくことの難しさがある。行政では難しいかもしれないが、見直しながら進めてもいいのではないか。評価においては取組や成果をもっと見せてもらえたらと感じた。

- ： 定量的な取組だけでなく、当初の目標には掲げられていなかった定性的な取組についてもしっかりと本市の評価に盛り込み、できる限り市民に対して、また評価委員の皆様に対しても、説明責任を果たしていきたいと考えている。
- ： 私も、数値目標だけではなく、定性的なKPIも組み合わせた実績評価とするのが良いのではと考える。
第3期を振り返って、第2期と比べて、どのような点が変わったと考えているか。
- ◎： 組織内の縦割りを廃したことで、産技研内の部署を超え、研究員が互いの強みを活かして企業の課題解決や成長支援に貢献できるようになったことが大きな変化だと認識している。
また産技研の見える化に取り組んだ結果として、産技研の監修した記事が科学雑誌Newtonに掲載されたことで、周囲からの評価にも繋がった。

(5) その他

～事務局から今後の予定について説明～

【3 閉会の挨拶】

- ・西本 京都市産業技術研究所理事長からの挨拶